

～倅せの土台をつくる～

ftlビジネス・スクールは、働く喜びを感じられる支援を目指します。

=====

関係者の皆様

このメールは、ご挨拶させていただいた方向けに発信させていただいております。

=====

1. 新規利用者募集枠
2. 支援ノートNo.110『こころのトリセツ②』
3. 近況
4. メディア関係案内
5. 研修・講演

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

1. 新規利用者募集枠

- ◆ 就労移行支援 ○ 余裕あり
- ◆ 就労継続支援B型 × 来年度については、都度お問い合わせください
- ◆ 生活介護 × なし
- ◆ 就労定着支援 △ ftlの事業所を通過した方のみ利用可
- ◆ 計画相談支援 × ftlの事業所を利用する方以外の受入不可

2. 支援ノートNo.110『こころのトリセツ②』

4.序破急

僕は彼と福祉施設で日々かかわり合い、「これならいける」と思い意中の職場へとつないだ。理由は、彼が施設内の訓練で、遅刻も欠席もせず、周囲のメンバーとトラブルも起こさずに働いていたことと、本人の「就職したい」という熱意、そして家族の「お願いします」という言葉があったからである。また、実習した職場と彼とが、相思相愛の状態だったからである。前職を離職したところから今回の職場との出会いを経て、就職後の職場定着についての推測までの序破急をイメージしても、ここは加速していい段階に思えた。そして、僕は「今だ!」と思った。その結果、日々のかかわり合いをする役目は新たな職場のひとたちにバトンタッチされた。就職する本人にしてみると、このバトンタッチには大きな意味がある。彼が福祉施設というありがたくもウザい存在から遠ざかるとき、そこには子どもがおとなたちの仲間入りをするときのような高揚感があるだろう。おそらく、この文章を読んでいるひとたちが通ってきたであろう道と同種のものである。崖をよじ登った先に見えるかもしれない、危うくも希望に満ちた新たな地平への憧れが、青年のこころを突き動かす。彼もまた、就職したときは、そんな気分であったに違いない。

ここから先は僕の憶測になる。彼は、職場にて、注意指導を受けることも含め、日々多くの体験をしていた。注意指導は、彼を落ちこぼれさせたくない、彼に学習させようという職場なりの期待を込めた愛情表現だったのだろう。普通であれば、これが効果を現す。

しかし、職場でまわりのひとたちが、当たり前のように教わったことを分かち合っている世界に、彼は入りきれていなかったのかもしれない。そんな状況のなかで、仲間たちにとっての幸福は、彼にとっての幸福と、思ったほど重なり合わなかった。そのため、知らず知らずのうちに、彼は孤立化していったのではなかったか。職場や援助者の洞察とフォローは、どの程度彼に合っていて、どの程度ずれていたのだろうか。

職場も家族も、彼のことを考えて誠意を持って指導をしていたことは事実である。就職した当初は、彼もそれを受け止めることができていた。ところが、3年が経過した頃には、その直球を受け止められるだけの力が、彼の側に残っていなかった。そして、そのころ模様は、孤立感から無力感へと変わった。その過程には、一体なにがあったのだろうか。

「豊かな人生とは、後悔がたくさんある人生だ」と棋士の羽生善治さんは言う。それは、一面を言い当てていると思う。一般に、人生は過ちの連続である。過つことを覚悟して社会に出て行くのであれば、本人の準備不足だと言わざるを得ない。では、援助者にとって過ちを予測するとはどういうことか。それは、過っても行き詰まらないように援助をするということである。複数の戦術があるのならば、過っても取り返しのつく可能性が大きいほうを選ぶことである。

翻って、彼の決断は持ち前に合わない歩みにつながっていなかったか。彼の人間的な魅力が摩耗してしまうような暮らし方になってはいなかったか。そして、職場の成熟という予測の難しい範囲に至っては、暗雲がたちこめてきた時点で撤退するということも含めて、選択肢はなかったのだろうか。

もっと戦略的なことを言うならば、彼への援助全体を見渡したときに、化学でいうところの「律速段階」に、もっと目を凝らして、じっくりと彼の持ち味をつかんでいたら、その後の過程に余裕が生まれたかもしれないと思う。もちろん、この場合で言うところの「律速段階」とは、施設内における訓練準備期間のことである。

遠まわりのできる人のほうが、長期的にはしばしば収穫が多いという事実を大多数の人は忘れている。

5.反抗期と出立（しゅったつ）

前回の文章で彼の紹介をしたときに、「けっこう頑固で、押しても引いても変わらないところがある」と書いた。彼には、その言葉通りのところがあったと思う。激しくはないけれど、地味にしつこく反抗し続けるし、折れることがない。一般に反抗には、反抗する相手に胸を貸してもらおうという意味が含まれていることが多い。社会に出る手前で、力試しと稽古をさせてもらおうという意味である。これは、相手が自分を見放さないであろうという、相手に対する信頼感が育っているからできることだとも言える。彼の反抗にも、そういう意味があったのだろうか。

彼は、離職や転職を繰り返しつつも経験を積んできたことで、良くも悪くも彼の中に「力量感」を膨らませていたのかもしれない。しかし同時に、それなりの生活年齢に達しているながら、職場に定着できていなかったという事実は「おぼつかなさ」を感じさせる。

おそらく、社会への出立とは「おぼつかなさ」を「力量感」が上回った瞬間に生じる決断によるものなのだろう。もちろん、いくらかの「おぼつかなさ」を抱えながら社会へと

出立するのは誰でも同じである。出立後に、「力量感」がより現実的なものになって、相対的に「おぼつかなさ」が目立たなくなる例が多いのも確かである。しかし、そういったエビデンスの中で、彼は少数群に入る人であった。出立した後に会った社会という現実の中で立ち往生した彼のような例は、少数群である。しかし、ゼロではない。その、ゼロではない少数群に、彼は入ったのである。だが、そこまでは誰も見抜けなかった。「力量感」と「おぼつかなさ」の矛盾を抱えているひとが、出立後、社会の波風に沈められずに泳げるのかどうかという問いに答えるには、あまりにもパラメーターが多すぎる。従って、判断には賭けの要素が含まれる。ありったけのデータを集めて予測を立てたととしても、最後は人間が、その感覚をもって決めざるを得ない。責任は、賭けを打った人間が負うのだ。

これは、この先どれだけAIが発達したところで変わらない。AIに推測させても、その後の責任まで負ってもらおうということは、倫理的にありえない。結局は、AIが弾き出したデータを人間が扱って人間が判断するのだ。判断を依頼する相手が、AIではなく占い師であっても同じ道理ではないか。

では、判断の主体は誰か。それは、本人であり、援助をしたひとたちである。本人のみであることはないし、本人が含まれないということもない。いや、あつてはならない。

6. ころのなり立ち

前回は、「ころはやっかいだ」ということを繰り返し述べた。映像や数値に変換して可視化できないのが「ころ」である。また、完全に本人に帰属しているのかということそうでもない。常に本人と相手との間にあるようなもので、本人の身体に収まっていないし、相手との関係次第で、ころ模様は変わってくる。

漱石は、ころを「知」「情」「意」に分けてみせた。実際には、「知」や「意」は、「情」の海に生かされている魚のようなもので、ころの活動は「情」から始まる。「知」や「意」は「情」という海がなければ現れない。AIが人間にとっての脅威になるのは、おそらく「情」を持つに至ったときだろうと僕は思う。それまでは、道具に過ぎない。

もっとも、古今東西、ひとの愚かしさは道具に振り回される形で現れることが多く、核兵器問題や、ハサミを例にした諺に見られるとおりである。いや、核兵器やハサミのような具体物としての道具以外にも言えることだ。例えば、大きな物語としての人生を想像しない「道具的条件付け」というアプローチが、療育、教育、医療、福祉の世界にはびこっていることに、誰がどのくらい危機感を持っているだろうか。その場しのぎを繰り返し、しかも、そのスパンが確実に短くなっているのを感じないか。医療・福祉・教育という多方面にわたるフォーマルな制度が、無自覚にそれを方向付けているとは思わないか。

ころや感情のなり立ちについては諸説あるのだが、僕は次のような考え方を支持している。まず、ころの大部分を占めているのは感情だと思う。感情という主観的経験は、立ち上がりや異にする三つの経験が混ぜ合わさって発生する。ひとつは内臓活動や筋肉運動など身体由来の神経情報を起源とする「情動性感情」。もうひとつは、視覚や聴覚など感覚器由来の神経情報を起源とする感情で「感覚性感情」。最後は積み上がっていく経験を自分の経験であると感じさせる感情で、新しい経験をそれまでの経験に連続させる「背景感情」である。※参考：『言葉と脳と心』山鳥重

「情動性感情」は、快・不快が対人関係という体験を重ねながら高度な人間的感情に分岐していった感情から、攻撃・逃避といった原始的な感情まで、ひとつの核から広がった連続的な心の動きである。

「感覚性感情」は、視覚や聴覚などの異なる神経入力系を基盤に発生する主観的経験で、「見えている」「聞こえている」など、それぞれの知覚処理系に固有の感情を生成する。これを一般に認知という。認知はその対象から意味を切り取る前段階のもので、概ね3歳以降に発達する「意味（概念）の世界」の皮一枚下に逼（せま）るものだと僕は思う。そこから観念・意味・概念を見出すと、これは認識に変化する。そう考えたほうが、実体に合う。この感情は、外部とつながっている感じがする。

「背景感情」は、経験したことを自分の経験と感じさせてくれる感情だという。これがないと、昨日の自分と今日の自分が同じであるという自明のことがあやしくなる。しかし、一般に自覚される感情ではない。

これらの三つの感情が交じり合って満たされているのがこころである。生きるということは、この三つの感情を揺さぶりつづけることであり、これが即ち「こころの活動」である。この活動が「思い」「観念」を生み出す。ただし、これらはそのままにしておくと思えどころがない。特に、情動性感情などは、泣いたり、笑ったり、叫んだりといった運動表現をとまわないと、それと自覚しにくい。つまり、整理がつきにくい。僕らも苦しくなると「感情の整理がつかない」などと言うのではないか。この「整理がつかない」こころを整理して見せるのが、言葉である。

7. 感覚の減圧手段

ひとにとって「感情の整理がつかない」感覚は、相当に辛いものである。その圧力を減ずるのが言葉である。言葉は、のっぺらぼうのような整理のつかない感情や感覚に、目鼻をつけ、相対化できない感覚の圧力を下げる方向に作用する。ただし、言葉の発達が遅れているひと（つまり、認知したものを対象化・相対化・概念化することが苦手なひと）にとっては、そのひとの感情にそぐわないラベルを外から貼り付けられる恐怖を伴う道具かもしれない。だとしたら、その違和感は大変なものだろう。僕たちが援助する相手のうち、言語の発達に遅れのある人たちは、この大変さを抱えている。ただし、それを補うように関係発達が豊かに育つこともあり、この力をうまく使って社会という大海原を泳いでいくひとも多い。これは、関係発達が豊かであれば、他者とのつながりも豊かになり、伴走者が増える可能性も増すからであろう。

事例としてあげている彼の場合はどうだろうか。彼は、職場で上手くいかなくなり、周囲から「ガンバレ」と言われつづけた。しかし、この言葉が、彼の「整理のつかないこころ」を整理するものだったのかと言われると、違っていたのではないかと思う節もある。そもそも、彼が「ガンバレ」と言われているときに、僕も含めた言っているほうのひとは、彼の感情をどれだけ洞察できていたのだろうか。ひょっとすると、あの時に彼がひと暴れしてくれたら、職場も家族も僕たちも「これはタダごとではない」と気づいたかもしれない。あるいは、暴れるのがまずいというのであれば、日常としての造形活動や運動などの表現はどうだろう。僕が今いる事業所では、動作、姿勢、不当緊張などに注目して、言葉以前の感情を汲み取るための援助を意識的にしているケースもあるが、当時の彼に対して

は不十分であった。職場も僕も、彼が絞り出すようにして口に出す言葉に頼りすぎていたのではないだろうか。おそらく、満身に喋ることができていなかったであろう彼が、整理のつかないところと状況をどうやって他者とシェアすればよかったのか。それが僅かばかりでもつかめれば、多くの発達障害者援助へのヒントになるに違いない。

6. 疾病利得

先月、「疾病利得」という概念を紹介した。ここで、彼にとってのそれについて再度考えてみたい。

彼にとっての疾病利得とは、なんだっただろうか。そのことを彼の生育歴から想像してみようと思う。彼は、小学校低学年から様々な事象を意味あるものとして認識していく力が遅れていた。中学生になると、いよいよその差は埋めようもないものになっていった。学校は、彼の発達遅滞を読み書き計算といった技能の遅れとして評価していた。しかし、当時の言葉でいう「知恵遅れ」である彼の発達を妨げているものは、そのような教科学習の遅れ以前のところにある。それは、「意味による世界の共有」という体験が決定的に遅れていたことにあるのではないだろうか。そういった面へのケアやフォローがないままに、進まない学習面への指導ばかりが繰り返されれば、彼は自分を価値あるものとして認めることができなくなってしまうだろう。追い詰められた彼は、いよいよ煮詰まり、その釣り合いをとるために、身体障害という表現をとったのだと思う。実際、彼は身体症状に関する精密な検査を受けたが、身体的には何ら障害が見当たらなかった。

思春期に、ヒステリー発作（転換性障害）というややこしい身体表現をせざるを得なくなった彼のところへのケアとフォローは、以上のようなことがわかっていなければできない。彼は、認識発達の遅れについて、ケアとフォローが不十分な状態で叱咤激励を受け続けた。それは、中学校を卒業して働き出してもなお続いた。

彼の身体障害が「身体表現性障害」だったとすると、彼がそれによって何を回避していたのか、あるいは、何を得ていたのかを考えて、それが現実場面で得られる状況を作る援助をすればいい。単純化して言えば、病気が治るほうが得な状況であれば、その方向に動くのが、いのちの特性である。その状況とは、彼がその持ち味を生かせる職場に勤めることだと僕は考えた。それは、ある一面からみれば正解だった。しかし、それが全てではなかった。

働くということは、本人の自尊心を低下させないことにつながる。これは大人にとってとても大事なことなのだが、自尊心ということを考えて、もうひとつ欠かせないことがある。それは、一般に子どもがどういうときに幸せを感じるのかを考えるとわかるだろう。子どもにとって、一緒にいる大人から「君と一緒にいるとハッピーな気分だ」というメッセージを受け取っているときほど幸せな時はない。大人の側が、忙しくてそれどころではないという時もあるだろう。そういう時は、胸の中で唱えるだけでもいい。そのことは唱えた大人の顔に出る。子どもはその表情の変化をキャッチするだろう。それだけで、子どものところにある不安や焦りは目減りするはずである。

同じように、何らかの伸び悩みや不調の最中にある相手とかかわるときは、どこかで彼の中にある「深いところでのまともさ」「成長の可能性」を信じる気持ちがあるといい。信じられない場合は、そういうものがあるに違いないと念じるだけでも、なにもしないで

いるよりはいい。それは援助者のたたずまいとして現れ、相手によい影響を与える。

しかし、援助者は相手を無理に「理解」しようとする必要はない。一朝一夕にはできないことを無理にするのは徒労であり、有害なだけだ。しかし、ひとは理解できないものであっても包容することはできる。援助者の中にある母性を動員してかかわるのだが、これにも塩梅が必要である。母性には、きつく包容しすぎて相手を窒息させるという副作用があるからだ。だから、生後間もない赤ちゃんを横抱きするように、ふんわりとしつつも決して落とさない感覚でかかわるのがいいように思う。

また、知的障害を含む神経発達症のひとたちの発達遅滞については、そのころと身体の発達段階を感じとることが有効である。全般的あるいは部分的な生活年齢と精神年齢のギャップを感じ取り、そこで何が起きているのかを想像すると、ほどよく包容できるようになる。それが相手と自分へのケアになるし、そこから次の一手についての見当がついてくることが多い。

僕の場合、発達に何らかの遅れがあるひとや、そうでなくても退行しているひととかかわるときに想像するのは、平均発達における3歳児変化を補助線として引いたときに浮かび上がってくる、対象者側からみた心象風景である。

そこに3者関係が成立し、社会の中にいる自分という領域を持つに至っているか。「助け合う」ことと「(現実や自分と)折れ合うこと」の体験をつめる状況にあるか。そして、その上に立って「仲間」ができていくかについて確認するためである。

以上は、20年前の彼から学ばせてもらったことである。最後に、児童精神科医である滝川一廣さんの言葉を引用して、ひと区切りつけたい。

知的障害とは、認識的側面の発達（学習）におけるおくれであって、すべての能力に遅れるわけではない。もちろん、そのおくれが他のおくれも二次的に派生させ、おくれはしばしば多重化する。しかし逆に、それをカバーしたり代償したりするために、むしろ発達する側面を見落としてはならない。そして、私たちがそうであるのと同様、喜びや悲しみの世界を深く生きており、なけなしの力を尽くして生きんと戦っている。私たちが思いあがりさえしなければ、そこが見えてくるはずである。

令和6年10月15日 高原浩

※ 支援ノートの文章は、事例として挙げられている人が特定されないように配慮されており、趣旨が変わらない範囲で名前や場所などの事実を加工してあります。

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

3. 近況

【就労移行支援 ftlビジネス・スクール】 **新規利用者募集中**

知的発達症（知的障害）を含む神経発達症（発達障害）のかたたちが中心の事業所です。実践的な環境で、企業就労と社会参加に必要な心構えやスキルを身につけています。就職

先とのマッチングは、利用期間中の体験的かつ実践的な体験を援助者と利用者との分かち合いながら訓練することを目指します。

チームとして協力し合い、折り合う体験を積む中で、個々に違う、ボトルネックとなっている課題を明確にします。具体的な傾向と対策をたて、就職に向けての援助を行います。

就職後に成長できる適職場に就けるような余裕を作ることを目標に、利用開始段階から多角的な評価と見立てをしっかりと行います。また、就職後には、継続して就労定着支援（通常3年半）を利用し、安定就労や自立に向けての援助や助言を受けることができます。

制度としての就労定着支援終了後も、OB会などを通じて、繋がりを大切にしています。

令和7年3月に特別支援学校高等部・高等学校・専門学校・大学などを卒業される方の利用枠もあります。

<http://www.ftl-1.co.jp/contact/>

【就労継続支援B型 ftlビー・ワーク】随時お問い合わせください

当事業所は、じっくりと腰を据えて就職を目指す方を対象にしたB型運営をしています。長い目でみつつ企業就労を明確な目標にしている方が利用しています。ftl就労移行支援のクオリティーはそのままに、就労継続支援B型の制度を利用して就職と自立に向けての援助を行っています。

また、将来的にftlの就労移行支援を使いたいという方にもお勧めです。日中、社会的役割を得て仲間と共に働くということを中心に据えながら、生活リズムと様々なライフスキルを整え、張りのある生活ができるように、日々の援助をしていきます。

<http://www.ftl-1.co.jp/contact/>

工賃収入を得て、社会参加していることを実感しながら過ごせる環境は、自尊心を下げることがを防ぎ、働き暮らすスキルと自信をつけます。

【発達保障型生活介護事業 ftlビー・ワーク】見学可 実習については応相談

発達保障の理念を掲げ、社会参加の手段として『働くこと』をベースにした生活介護事業所です。利用者は皆、社会の中に役割を持ち、工賃も稼ぎます。糸賀一雄さんの言葉「この子らを世の光に」を実践したいという想いと共に始まり、若々しいメンバーが、仲間意識を持ち、張り切って仕事に就いています。療育的な視点を持って成長発達を保障することを目的とした事業所です。基礎的な力がついた方については、就労移行支援や就労継続支援B型の現場で実習する機会を設けています。また、働くだけでなく、一体感を楽しみながらの仲間作り、生活技能習得プログラムや地域のかたたちといっしょに活動するプログラムも実施しています。

<http://www.ftl-1.co.jp/lp/lifecare/>

【就労定着支援事業】ftlの事業所を通過した方のみ利用可

就労移行支援や就労継続支援を使った後に企業へと就職した方たちを対象にした、職場への定着支援事業です。人となりをつかんだ上での、テーラーメイドの就労定着支援です。

<https://1drv.ms/b/s!Ah7JHDWO-znfx3thUQpVzZLqFVL7?e=kVqNYL>

【計画相談支援 ftlアクセス】ftlの事業所を利用する方以外の受入は中止しております

児童・成人とも対象にしております。フォーマルな障害福祉サービスを使う方を対象に、サービス利用計画を作成したり、様々な生活相談に応じる支援を行います。

* 土曜プログラム・特別プログラムについて (ftlの就労移行支援・就労継続支援B型利用者が対象です)

土曜日に行われるプログラムです。以下が、プログラムの例になります。

① どだいの会 (身体感覚の発達・状況判断能力・社会性を発達させます)

社会適応の障害になり得る発達の遅れは、脊椎を中心にした身体図式、身体の基本動作、感覚器の使用、記憶と操作、指示理解と把持などが大きな要素になって形成されます。どだいの会では、楽しみながら身体動作の状態を確認し、個別訓練メニューを考えるとときのヒントとして現場へとフィードバックします。まさに、就労自立の土台になる活動です。

② ICT教室 (PC技能訓練)

WordやExcelの使用方法を中心に、基礎から学びます。あわせて、事務的な作業指示に対する理解度を確認し、傾向と対策をつかみます。働き始めたときに役立つ様に、メンバーの段階に合わせてプログラム設定を行います。ソーシャルスキルの訓練にもなります。

③ 「和太鼓講習」

市民グループ『富士見太鼓の会』様の稽古に参加しながら、和太鼓を楽しみ学びます。

<https://www.fujimitaiko.com/>

和太鼓の良さは次のような点にあります。

- 音階がなく、強弱とリズムで表現するため、わかりやすい
- 耳よりも身体全体で感じる音であるため、認識能力の差があっても共有しやすい。非言語コミュニケーション能力が育つ。
- アイコンタクトをとり、息を合わせて全員でひとつの曲を演奏するため、仲間との一体感や、場を分かちあう感覚を楽しみながら得られる。
- 腰を入れた動作を主としており、随意筋と不随意筋を協調させる運動である。

④ 専門講師による特別プログラム

就労自立を達成するために必要な知識をワーク形式で身につけていく場です。社会生活を維持するために不可欠な内容が中心になります。オープンな雰囲気、楽しく真剣に学びます。

⑤ “自立講座” “OBとの交流会” 等

就労自立生活の実際について、専門家や経験豊富な職員が、利用者の皆さんにわかりやすく説明します。OBとの交流会では、ftlから就職した先輩たちが、今活躍している職場や仕事の説明をしてくれます。それを題材に就職についての理解と意識を深める場になり

ます。どれも、絆を深め、就労自立に向けての意欲や意識を高める大切な時間になります。

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

4. メディア関係案内 (全て、全国の書店やインターネットから購入できます)

○『家族で支援する発達障害 自立した進学と就労を進める本』 高原浩 監修
河出書房新社

<https://www.kawade.co.jp/np/isbn/9784309254524/>

選択肢が増えたように見えて、実は問題点も多い進学と就労について、現実の課題をわかりやすく解説した上で、自立した選択ができるようになるための実践的な情報を伝えます。

○『現場発！知的・発達障害者の就労・自立支援』 高原浩 著 学事出版

<https://www.gakuji.co.jp/book/b10034370.html>

重版(3刷)好評発売中です。

○『飼い殺しさせないための支援』 高原浩 著 河出書房新社

***全国学校図書館協議会選定図書に選定されています。**

<http://ap27.eurotec.ne.jp/np/isbn/9784309248943/>

○『現場発！ソーシャル・インクルージョンとインクルーシブ教育』 高原浩 著 学事出版

<https://www.gakuji.co.jp/book/b10034212.html>

著者の体験談を基に、ソーシャル・インクルージョンを障害福祉の現場から具体的に問い、インクルーシブ教育を教育現場の実践者との対談を通じて考える本です。障害福祉の本質に迫ります。日本教育新聞の書評に掲載されています。

<https://www.kyoiku-press.com/post-211922/>

○ジョブメドレーアカデミー オンライン研修講師として登壇中(下記リンクは、案内のみです)

『個別支援計画と支援方針の立て方～就労支援編～』

『サービス管理責任者向け研修』

<https://jm-academy.jp/syougai-fukushi>

○NPO法人 日本インクルーシブ教育研究所 多様な発想支援士養成講座

『対人援助のコツ ～非施設的実践の現場から～』

<https://x.gd/TaltY>

<https://www.jiei.org/tayounahassou/step4itoshi/#1-3>

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

5. 研修・講演について

● 通年 神奈川県立中井やまゆり園 支援改善アドバイザー

● 令和6年9月21日 社会福祉法人 朔日 NPO法人 朔日の会
児童・成人部門 職員研修

- 令和6年11月22日 東京福祉専門学校学生実習受け入れ①
- 令和6年11月29日 東京福祉専門学校学生実習受け入れ②

研修講師・講演のご依頼につきましては、直接お電話いただくか、メールまたは以下のお問い合わせフォームからどうぞ。

<http://www.ftl-1.co.jp/contact/>

<http://www.ftl-1.co.jp/>

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

令和6年10月15日
ftlビジネス・スクール/ftlビー・ワーク
サービス管理責任者 高原浩